岡崎開市

500年

記念冊子

2024
岡崎開市 500年

岡崎市

表紙写真の説明

令和6（2024）年8月3日に開催された、岡崎城下家康公夏まつり第 76 回花火大会のオープニング式典で、開市 500 年の記念となる仕掛け花火を実施しました。

岡崎開市 500 年。令和6（2024）年は岡崎の楽市の始まりから 500 年が経過した節目の年。大河ドラマ「どうする家康」を契機に得られた徳川家康公や岡崎への関心の高まりをしっかり未来へとつなげていき、のぼり龍のように勢いよく、もっともっと岡崎を盛り上げていきたいという思いが花火に込められました。

目次

巻頭に寄せて …… 2

第1章　岡崎の開市 …… 3
1　岡崎開市500年とは …… 3
2　現代に息づく岡崎の“市”―戦後の闇市から生まれた「二七市」の興隆 …… 13
3　現代に息づく岡崎の“市”―市民の記憶と商店街の風景 …… 14

第2章　岡崎開市500年を盛り上げる市の活動 …… 15
1　記念ロゴマーク・のぼり旗の製作 …… 15
2　記念ロゴマーク・のぼり旗の掲示・活用 …… 16

第3章　地域・団体の取組 …… 17
1　連尺通発展会「記念手ぬぐい」制作 …… 17
2　未来城下町連合「記念フラッグ」の展開 …… 18
3　長福寺・宇津忠茂公岡崎開市五百年祭 …… 19

第4章　岡崎開市500年2024岡崎城下家康公秋まつり …… 20
1　開市500年の節目を祝う秋の一大イベント …… 20
2　岡崎開市500年ゾーン …… 22
3　開市500年にちなんだスタンプラリー …… 26
4　ゼニーで楽しむ、岡崎開市500年の買い物体験 …… 27

第5章　次の500年に向けて …… 28
岡崎から、“これからの商い”をつくる …… 28

あとがき

巻頭に寄せて

令和6（2024）年、岡崎市は「開市」から500年という歴史的な節目の年を迎えました。

その起源は、大永4（1524）年にさかのぼります。徳川家康公の祖父である松平清康公が、家臣・大久保忠茂の計略により山中城を攻め落とし、岡崎城へ入城しました。その功績を賞して、清康公が忠茂に市場の管理権を与え、岡崎に“楽市”が開かれたことが、本市の商業の始まりと伝えられています。

以来、岡崎のまちは幾多の時代の変遷を経ながらも、商人の営みに支えられ、暮らしと文化を育んできました。とりわけ今日においても、地域経済の重要な基盤として活気を保ち続け、地域の事業者の皆様が、中心市街地や商店街におけるにぎわいの創出、観光と連携した新たな価値の創造や消費の拡大など、多岐にわたる努力と創意工夫を重ねてきたことにより、岡崎のまちは時代に合わせて形を変えながらも、人が集まり活気にあふれるまちとして歩み続けています。

この歴史的な節目にあたり、市民の皆様をはじめ、企業、各種団体が一体となり、多岐にわたる記念事業が展開されました。中でも「岡崎開市500年2024岡崎城下家康公秋まつり」では、商店街の歴史に触れることのできるパネル展や、これからの岡崎の商業を担う出店者によるチャレンジマルシェが催され、多くのかたに御参加、御協力を賜りました。また、フラッグや手ぬぐいといった記念品等の制作も相まって、地域全体に祝祭の華がもたらされました。

記念事業を盛り上げていただいた企業や各種団体など多くの関係者の皆様に、深く敬意を表するとともに、心から感謝を申し上げます。

本市といたしましても、地域の魅力ある店舗や産業をさらに磨き上げるとともに、観光やイベント、デジタル技術の活用などを通じて、人の流れと消費を生み出し、住んで快適、楽しいまち、そんな「夢ある新しい岡崎」の実現に取り組み、将来、「あの時代の市政の結果、今の岡崎がある」と言われるようなまちづくりに全力で邁進してまいります。

本冊子が、岡崎の商いの歩みと誇りを次の世代へと伝え、皆様がこれまで以上にふるさと岡崎への愛着と誇りを深める一助となることを願っております。

岡崎市長

内　田　康　宏

第1章　岡崎の開市

1　岡崎開市500年とは

令和6（2024）年は、“岡崎の開市”から500年が経過した節目の年です。市や関係各者により、令和5（2023）年に放送された大河ドラマ「どうする家康」を契機に得られた徳川家康公や岡崎への関心・愛着の高まりをしっかりと将来につなぐとともに、家康公の功績や生き方に想いを寄せながら、にぎわいの創出を目指した事業を実施しました。

第1章では、「岡崎開市」の起源とその背景、そして時代とともに移ろう岡崎の商業の姿について、史実と地域の記憶をもとにご紹介します。

【協力：株式会社おかしん総研】

本章では、株式会社おかしん総研様にご協力をいただき、岡崎信用金庫が発行した「経済月報2024.1月号」の特集記事を縮刷し、開市500年の歴史についてご紹介します。

岡崎開府500年

今から500年前の大永4年（1524年）、徳川家康公の祖父、松平清康が山中城を攻略し、その後岡崎城（明大寺）に入った。山中城攻略に功のあった大久保忠茂は、褒賞として市場の徴税権を与えられたが、税を免除したことから岡崎の市が栄えた。
岡崎開府（開市）の年とされる。

東海道名所圖會6巻[3]「岡崎」
（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

岡崎開府（開市）のいわれ

松平清康の山中城攻略

松平清康は、親氏（ちかうじ）を初代とする松平氏の7代目で、徳川家康公の祖父にあたる。武勇に優れ三河地方に勢力を拡大した。

安城松平家の出身で、大永4年（1524年）、岡崎の西郷（松平）信貞が持つ山中城を攻略した。同城は、岡崎東部・岩尾山の山城で、眼下に鎌倉街道と南海道を見下ろす要害の砦だった。この山中城攻めは家臣の大久保忠茂の献策によるものであった。

西郷信貞は、菅生川（乙川）の南岸、明大寺に居館（岡崎城）を有していた。山中城を落とされたため、娘の於波留（おはる）を清康に嫁がせて家督を譲り、自らは大草（現在の幸田町）に退いた。清康は明大寺の岡崎城に入り、以後岡崎を拠点として活躍することとなる。

清康の岡崎城入りは大永4年が通説

清康の岡崎城入りの時期は、山中城攻めと同年の大永4年とする説が通説である（『旧編岡崎市史』『徳川家康と其周囲』柴田顕正、『新編岡崎市史』新行紀一）。このほかに、清康は一時期山中城に居住し、大永7年（1527年）までの何れかの時期に岡崎城に入ったとの説がある（『三河 松平一族』平野明夫）。資料に乏しく確定は困難であるが、過去、通説に基づいて記念祭が行われてきた。

大久保忠茂による税の免除

山中城攻略は大久保忠茂の功が大きかった。

清康は忠茂に恩賞を与えようとしたが忠茂は固辞し、再三の命に、領国内にある市場の徴税権を得ることを願い出て許された。忠茂は税を免除したので、領国内の商いが活発化した。

大久保忠茂は、大久保家の祖である。同家は徳川十六神将の一人、大久保忠世や、初代小田原藩主で老中の大久保忠隣など多くの人材を輩出した。

有名な大久保彦左衛門忠教（ただたか）は忠茂の孫にあたる。山中城攻略から約100年後、『三河物語』において松平清康と大久保忠茂の事蹟を記した。

松平清康公像（隨念寺蔵）
岡崎市指定文化財
（画像提供：岡崎市美術博物館）

山中城址の碑
岡崎市指定史跡

開府と開市

なお、大正13年（1924年）の400年祭以来、岡崎市は大久保忠茂の功績で「市（いち）」が開かれたとの意味で「開市」という言葉を用いてきた。一方、当時の新聞などは、町が発展した端初という意味でより一般的な「開府」という言葉を使っている。

『新編岡崎市史総集編』では、岡崎開市400年祭について「岡崎開府400年祭ともいう」と解説している。

竜頭山に岡崎城を築城

享禄4年（1531年）、松平清康は、居城を菅生川の南岸・明大寺から、北岸の竜頭山に移した。現在の岡崎城の場所である。大林寺、甲山寺なども城の北側に移した。

城の周囲に居住する者が増え、後々に商人町が栄えた。移城から11年後の天文11年（1542年）には、岡崎城で徳川家康公が誕生している。

松平清康の岡崎入城は、家康公に至る松平家が同地を拠点と定め、以後の発展につながったという点で画期であった。

山中城址のある岩尾山

大正13年の「岡崎開府（開市）400年祭」

「慢性不況」下の大正13年

今から100年前、岡崎を取り巻く経済・社会情勢は、明るいものではなかった。

第一次世界大戦はわが国に空前の好景気をもたらしたが、その反動も大きかった。

終戦の翌々年、大正9年3月には株価が暴落、4月から7月にかけて全国で銀行取付け騒ぎが続いた。綿糸や生糸相場も半値以下に値下がりし、「反動恐慌」「戦後恐慌」という言葉が生まれている。パニックが収まった後も「慢性不況」が続いた。

さらに、大正12年9月1日には関東大震災が発生し、わが国に甚大な被害をもたらした。政府は、「勤倹」を国民に浸透させようと、各県に勤倹奨励地方委員会を設置させていた。

「岡崎開府（開市）400年祭」

こうした暗い世相の中ではあったが、大正13年、「岡崎開府（開市）400年祭」が盛大に開催された。

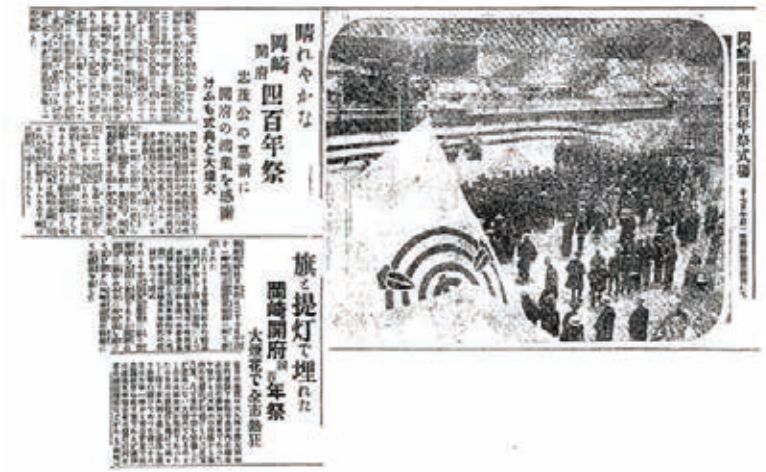
4月26日、山中城址において石碑の除幕式が行われた。「山中城址」の題字は大久保家の子孫、大久保忠言子爵の書。碑文は、岡崎出身の著名な地理学者、志賀重昂が書いた。400年祭の趣旨を簡潔に伝えたものであった。

5月26日には、大久保家の菩提寺である長福寺において大久保忠茂の墓前祭が行われた。続いて、松平清康の墓所がある隨念寺において墓前祭が執り行われている。

翌27日には、岡崎公園において「開府（開市）400年祭式典」と「市民祝賀園遊会」が開催された。午後から夜にかけては祝賀大煙火として2尺玉はじめ約1000発の花火が打ち上げられた。

最終日の28日は、午後、岡崎市公会堂において開府（開市）400年記念講演会が催された。娯楽の少ない時代、各町内では屋台を出したり、提灯行列を行ったりして400年祭を祝った。

当時の新愛知新聞（中日新聞の前身）は、「晴れやかな岡崎開府四百年祭」（5月27日付）、「旗と提灯で埋れた岡崎開府四百年祭」（5月28日付）と詳細を報じている。



「新愛知」新聞　大正13年5月27、28日記事

志賀重昂

「山中城址」石碑に記された志賀重昂の碑文

「大久保左衛門五郎忠茂　世良田清康の為に謀りて山中城を取り　次いで岡崎城を取る　清康岡崎の租税を挙げて忠茂を賞す　忠茂君命と称え岡崎の租税を免ず　四方の商売謳歌して岡崎に集まる　岡崎市の今日あるは実に此処に胚胎す　今岡崎開市四百年祭に際し碑を山中城に建て　岡崎市発祥の概梗を伝ふることとなす

大正十二年十月　志賀重昂誌」

「岡崎開府（開市）400年祭」と岡崎信用組合の創業

開府（開市）400年祭の3ヵ月後に設立

岡崎開府（開市）400年祭が盛大に行われた3ヵ月後。大正13年8月1日、岡崎信用組合が誕生した。

所在地は岡崎市菅生町8番地。現在の岡崎信用金庫本店のすぐ側である。初代組合長の鶴田清重以下、僅か5名の役職員でのスタートだった。

当時、市内には岡崎銀行、額田銀行という二つの有力銀行があった。しかしながら、小規模企業向けの金融は、長らく頼母子講や無尽、高利貸に頼るという状態が続いていた。漸く大正6年に至り、産業組合法を一部改正し、都市部の中小企業金融のための「市街地信用組合」が誕生すると、設立の

岡崎信用組合創業時の役職員

動きは全国に広がった。

岡崎も同組合の指定都市となったことを受け、創業者の鶴田清重は、信用組合設立に向けて動き出した。鶴田家は、戦国時代から菅生町を本拠とする旧家で、江戸後期の三河を代表する俳人、鶴田卓池も一族の出身であった。

岡崎信用組合設立の趣旨

大正13年7月11日、鶴田清重は334名の組合員を集め、愛知県知事あてに「産業組合設立許可申請」を提出した。設立許可申請に添えられた「事業計画書」には、二つの設立理由が掲げられていた。

第一は、岡崎市は交通の便が良く、産業発展の気運があるが、銀行を利用しうるものは一部に止まっているため、「中小産者を救済し、進んで産業発展の道を構するの必要に迫り、時代通応の経済機関たる信用組合設立をせんとす」というものであった。

そして第二に、「開市四百年祭の祈念事業とし、市内産業の経営状況に鑑み痛切に必要を感じたるに因る」との理由が掲げられている。

「開市四百年祭の祈念事業」としたいとの理由は、第一の主たる理由の補強材料であるが、「痛切に必要を感じ」という表現に、創業者・鶴田清重以下の信用組合設立に向けた気持ちが込められていた。

昭和49年発行『岡崎開市450年』表紙絵

連尺町人まつり　開市460年祭
（画像提供：連尺通発展会）

受け継がれてきた記念事業

昭和49年の「岡崎開府（開市）450年祭」

「徳川家康公の祖父、松平清康が山中城を攻略し、岡崎城に進出した。大久保忠茂が税を免除して商業を発展させた」という伝承は、大正13年の400年祭で広く周知されて以来、岡崎で受け継がれてきた。

昭和49年には、「岡崎開府（開市）450年祭」が催された。主催は、岡崎市、岡崎市教育委員会、岡崎市観光協会、岡崎商工会議所。11月1日から24日にかけて、商業感謝セール、民謡おどり大会、記念講演会、墓前祭、記念式典など多くのイベントが催された。

地元商店街が中心のイベント

450年祭以降も、岡崎市中心市街地の商店街と商工会議所が連携して、開府（開市）を記念するイベントがほぼ10年毎に開催されてきた。

市内中心街は岡崎城の東側・大手門前の連尺町を中心に発展した長い歴史のある商店街である。

江戸時代の連尺通り（『岡崎市史 第三巻』（株式会社名著出版）より「三州岡崎領往還略絵図」（一部抜粋））

研究者に聞く

松平清康の進出で岡崎は発展した

岡崎市美術博物館元副館長
堀江（ほりえ） 登志実（としみつ） 氏

1957年生まれ　岐阜市出身
名古屋大学文学部史学科卒
岡崎市美術博物館元学芸員
岡崎市美術博物館元副館長
愛知大学綜合郷土研究所非常勤所員
著書『近世の矢作橋　日本一長い橋』
共著『シリーズ藩物語　岡崎藩』
編著『三河の街道をゆく』
『岡崎藩の寛政改革』など論文多数

元々、三河守護代・西郷氏が支配していた岡崎

元々、岡崎という土地は、三河守護代の西郷氏が支配していました。南北朝以来の古い家柄です。大草（現在の幸田町大草）から出て、岡崎を三河統括の拠点としました。

岡崎の特徴は、中心部を東西に菅生川が流れていることです。京と関東を結ぶ街道は川に沿って通ることになります。西郷氏の時代、東海道は未だなく、鎌倉街道が主要街道でした。菅生川の南側を通っていました。西郷氏も南側の明大寺に居城を構えています。現在、徳川家康公の騎馬像やオートリバーサイドテラスのある辺りです。発掘調査で居館跡も確認されています。

また、西郷氏は、菅生川の北岸、竜頭山という小高いところに砦を築きました。北から侵攻してくる松平氏を警戒してとのことと考えられます。後に松平清康が岡崎城を作る場所です。それゆえ、岡崎には歴史的に二つの岡崎城があったのです。

松平清康と対立した岡崎松平家の誕生

松平氏は、奥三河の松平郷から岩津に出て、3代信光の時代に大きく勢力を拡大しました。信光は伝承では40人以上も子どもを作っています。宝飯郡や碧海郡、五井や形原などを征服しては、自分の子どもたちに土地を与えて分有させた。後に「十八松平」と言われる多くの分家の原型を作ったのです。

この信光が岡崎の西郷氏を攻め、当主の西郷頼嗣を大草に退去させた。同時に息子の光重を婿養子に入れて西郷氏を名乗らせたのです。三河守護代の正当性を継承した形にした。これが岡崎松平家です。

一方、安城城も占拠し、安城松平家ができます。信光の次の代になると岩津の本家松平氏は力を失い、安城松平家が惣領家となっていきます。そこに生まれたのが、松平7代清康です。

山中城攻めで関係を深めた大久保氏と松平家

松平清康は、対立する岡崎松平家の山中城を攻略しました。家臣の大久保忠茂の進言が大きかったとされます。

大久保氏は上和田（現在の岡崎市上和田町）に一大拠点を持っていた。それに加えて、山中城のあった山中から龍泉寺にかけても力を持っており、土地に明るい。要害の地である山中城を落とせば大きな手柄になる。山中城攻めには、そうした事情があったと思います。

忠茂が山中城攻めを進言した頃から、大久保氏と松平家の接点が出てきます。忠茂の孫に当たる大久保彦左衛門は『三河物語』を書きましたが、この時期から先祖の記述が増えてくる。徳川四天王の酒井家などよりは、譜代家臣としては新しい家柄なのです。

松平清康の岡崎入城

大永4年（1524年）、山中城を落とした松平清康は、岡崎松平家の当主西郷信貞を大草に退去させ、信貞の娘於波留を妻に迎えました。3代信光が西郷氏を攻略した時と同様、家督を継ぐ形をとったのです。

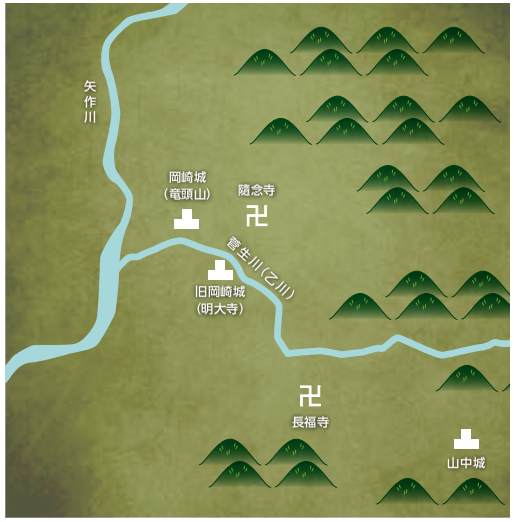
しかし、翌年には妻の於波留を離縁、信貞も死去します。西郷氏・岡崎松平家は絶え、清康の岡崎支配が完全なものとなったのです。

なお、山中城攻略後、清康は同年中に明大寺の岡崎城に入ったとされます。『徳川家康と其周囲』を書いた柴田顕正氏や、『新編岡崎市史』の新行紀一氏が、大永4年岡崎城入城説を唱え、通説となりました。

実は、山中城攻略後、すぐに岡崎城に入ったのか、暫く山中城に居住していたのかは明確には分かりません。ただし、山中に居館があって清康や家臣がある程度の期間生活していたという具体的な物証や伝承もない。交通の要衝である明大寺に直ちに移ったと考えるのが妥当ではないかと思います。

岡崎の「市」の発展

当時、松平の領国内には「市」が沢山ありました。「関野済安聞書」では、領国内に17か所の市があった。大久保忠茂は、山中城攻略の恩賞として市の「舛（ます）」を得たとされます。市場の管理権を得た忠茂は、税を免じました。清康が支配する下で忠茂による市場振興策がとられたということでしょう。



松平清康の岡崎城築城と連尺町の発展

山中城攻めから7年後の享禄4年（1531年）頃、松平清康は菅生川北岸の竜頭山の地に岡崎城を築城します。同時に、大林寺を城の北側に甲山寺を安城から移転させます。いざという時の要害としたのです。

岡崎城の大手門前に「岡崎市場」ができます。常設ではなく、月3回とか6回と日を決めて開かれた市と考えられます。場所は、岡崎城の東側、現在の連尺町のあたりと推定されます。この連尺町を中心に近世商業の中心地として岡崎が発展していくのです。

研究者に聞く

松平氏研究の進展により、新しい見解が出てきている

松平清康は、安城松平家を継いだのか、それとも独立したのか

20年ほど前に、『三河　松平一族』という本を出版しました。当時、松平清康は、父信忠から安城松平家の家督を継承したと認識していました。

現在でも、殆どの徳川・松平関連の書物には、清康は若くして安城松平家4代当主となったと書かれています。一般にもそのように認識されています。

しかし、その後、新しい見解が出てきました（「新編安城市史」ほか）。安城松平家の家督は、信忠の弟（清康の叔父）の松平信定が実質的に継いでおり、松平清康は家臣を引き連れて一旦は独立したという説です。

重要な根拠が「松平一門・家臣奉加帳」です。清康の名前が安城宗家から離れた場所に書かれています。家督を継いだとみるには不自然な位置です。

この見解によれば、松平清康は山中城に入り、その後、岡崎松平家の当主として実力をつけた後、安城松平家の家督も信定から受け継いだとします。

私も、現時点では、清康独立説の方が説得的かなと考えています。

松平清康は、一時期、山中城に居住した

松平清康は山中城を攻略した後、しばらくの期間、同城に居住していた形跡があります。

理由の一つは、今申し上げた「松平一門・家臣奉加帳」に「医王上（かんじょう）」という表記が出てくることです。記載位置から考えて清康の室（妻）と考えられます。「医王」とは山中城の別名で、「上」は室のことです。室が山中城にいた以上、清康も一緒に居住していたと考えるのが自然です。

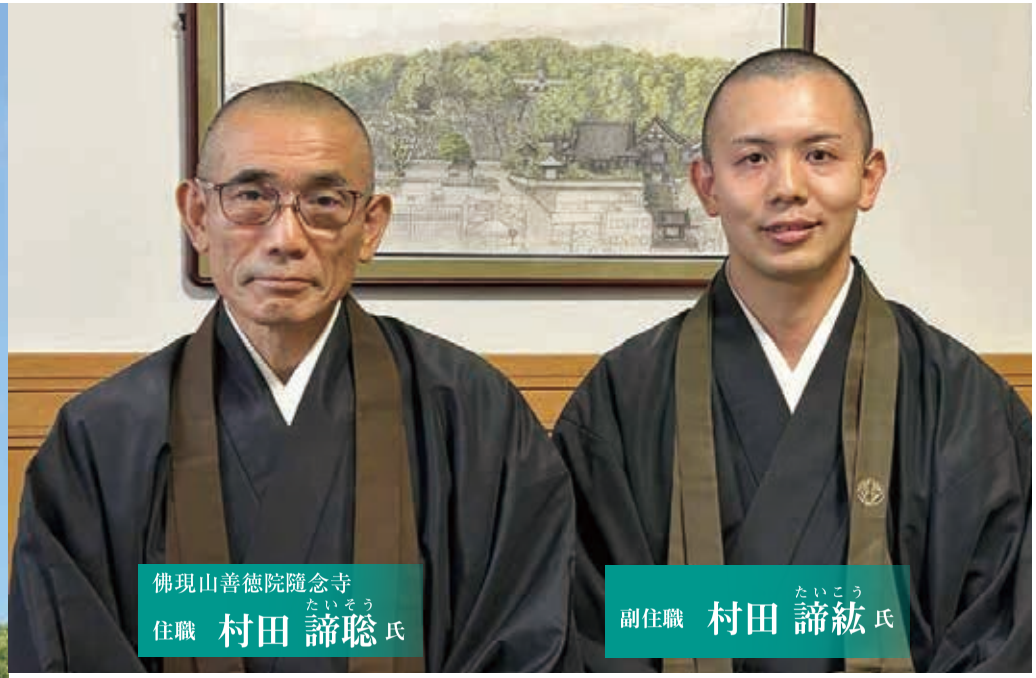
今一つは、「山中譜代」という言葉があることです。山中居住時代があったからこそ山中譜代の称ができたのでしょう。

そのように考えると、大永4年（1524年）、山中城を攻略した後、直ちに明大寺の居館に移ったという説は、時期が早すぎると考えます。大永7年（1527年）4月には、連歌師の「宗長手記」により、岡崎が清康の家城であると確認できます。そうすると、大永7年4月までの何処かのタイミングで山中城から岡崎の居館に移城したと考えるのが自然です。

國學院大學講師
平野（ひらの）　明夫（あきお）　氏

1961年生まれ　千葉県柏市出身
國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期満期退学。博士（歴史学・國學院大學）。國學院大學兼任講師・駒澤大学非常勤講師。元千葉県文書館嘱託。室町・戦国時代から江戸時代にかけての時代について、徳川家康およびその先祖、家系を中心に研究を進めている。著書に『三河　松平一族』（新人物往来社、2002）、『徳川権力の形成と発展』（岩田書院、2006）、編著に『家康研究の最前線　ここまでわかった「東照神君」の実像』（洋泉社、2016）。

鐘楼門



佛現山善徳院隨念寺
住職　村田 諦聡（たいそう）氏

副住職　村田 諦紘（たいこう）氏

松平清康公墓所がある隨念寺

永禄5年（1562年）、徳川家康公が、松平清康と久子姫（清康の妹）の菩提を弔うために建立した。大正13年の「岡崎開府（開市）400年祭」の際には、清康の偉業をたたえ盛大な墓前祭が行われている。

東海道を見下ろす丘陵地に立つ隨念寺

隨念寺は、岡崎市内でも特別の場所にある。

岡崎城の東の入口が籠田惣門だ。そこから東に「惣門通り」が延びる。三百メートルほど歩くと南北の北の道「門前通り」と交差、左折して北に向かうと隨念寺の山門が目に入ってくる。石段を登りつめたところに鐘楼門がある。住所は門前町。隨念寺に因んで付けられた地名である。江戸時代、同寺を中心にこの地域が発達した。

隨念寺は東海道を見下ろす丘陵地に位置する。堅牢な楼門と広い境内地。城を守る拠点としての役割も担っていた。境内に立ち、西の方角を望むとしっかりと天守閣が見える。

清康の妹、久子姫

天文4年（1535年）、清康が尾張森山で家臣阿部弥七郎に殺されると、現在の隨念寺の場所で荼毘に付された。当時は丸山という地名で、墓塔も立てられた。

清康には久子姫という妹がい

松平清康、久子姫の墓　（画像提供：隨念寺）

本堂と大方丈

松平清康公像（随念寺蔵）
岡崎市指定文化財
（画像提供：岡崎市美術博物館）

た。家康公の大叔母に当たる。生母於大の方が離縁されると久子姫が幼い家康公を、3歳から6歳までの間、養育したという。永禄4年（1561年）、岡崎城内で没すると、遺言により清康と並んで墓が建てられた。家康公は当時21歳。桶狭間の戦いから2年後、岡崎城主として自立した時期だった。清康と久子姫の菩提のため堂を建立。佛現山善徳院随念寺と号する浄土宗の寺院である。開基した魯聞上人は、岡崎における浄土宗の中心的な寺院、大樹寺の魯耕上人の直弟子だった。

本堂裏の石段を上ると、土壁を巡らせた一段高い場所に清康と久子姫の御廟所がある。寺には、久子姫が使っていたと伝わる箪笥を加工して作られた箪笥もある。

随念寺の寺宝が松平清康の肖像画。浅葱色の肩衣を着し、右手に扇子、左手に数珠。落ち着いた姿が描かれている。「松平清康公像」として伝わる唯一の画だ（岡崎市指定文化財）。随念寺創建時に家康公から寄進されたものである。

風格のある大きな庫裏

いずれ28世として随念寺を継がれる村田諦紘（たいこう）副住職に境内の案内をお願いした。まず江戸中期に造られた大きな庫裏。高い天井に張り巡らされた巨大な梁が印象的だ。梁の下部には松やにが溜まっている。まだ木が生きているのだという。

庫裏の梁

「実は、本堂より庫裏の方が大きいのです。いざ戦闘が始まった時は、たくさんの物資を置き、大勢の兵も入る。その備えです」。寺の石垣も城と同じ3層の武者返しになっている。

能舞台のある大方丈（書院）、鶯張りの本堂

「大方丈には、位の高い方がお参りに来られた時、寛いで頂くための『上段の間』があります。その正面が能舞台です。本堂も、住職が居る内陣と参拝者が座る外陣の段差がありません。通常は内陣を高くするのですが、殿様と住職の座る場所の格差を無くしています。廊下も鶯張りにして殿の御成りがすぐ分かるように工夫してあるのです」。山門からの石段も、身分の高い方が駕籠で登るために一段ずつの奥行を深くしている。駕籠が揺れないための配慮である。

上段の間

能舞台

明治期の危機、教育施設として残る

明治に入り、「神仏分離令」をきっかけに廃仏毀釈運動が全国に広まった。多くの寺院が取り壊され、徳川家ゆかりの随念寺も廃寺の危機に直面している。これを乗り切るため、当時の住職は有力檀家と相談の上、思い切った手を打った。新たに作られる教育施設に供するため、本堂を残し、書院と庫裏を額田郡に寄贈したのである。

現在の「梅園小学校」、「愛知教育大学附属岡崎小学校」、「岡崎商業高校」、「岡崎北高校」の前身の教育が随念寺で行われた。明治後期に至り、寺は書院と庫裏を買い戻し、漸く旧の姿に復した。

岡崎町立高等女学校（現岡崎北高校）第1期生集合写真
（画像提供：随念寺）

教育施設当時に使われていた机

「岡崎北高は、明治期に岡崎町立高等女学校として発足しました。随念寺で撮った120年前の第1期生の集合写真が残っています。当時の女学生の日記には、寺でテニスをしたと書いてあります。岡崎商業高校の皆さんとも交流があります。『岡崎学』という授業で1年生全員が話を聞きに来ることになっています」。

戦国期の久子姫や家康公の時代から、江戸の画僧や儒学者、明治の学生たちに至るまで、460年を超える随念寺の歴史には多くの人たちが関わっている。

山門

海雲山長福寺
住職 加藤 徳昌（とくしょう）氏

大久保家の菩提寺 長福寺

大久保家の菩提寺「長福寺」は、岡崎市の南東、竜泉寺町にある。広い寺領の一角に大久保家累代の墓が並ぶ。

竜泉寺町の長福寺

長福寺は、岡崎市の南東、竜泉寺町にある。田園地帯の中にあり、すぐ側まで丘陵が迫る。大久保忠茂が功を挙げた山中城址へは、約4キロの距離だ。

山門の前には、石碑が立つ。「法華宗 長福寺 岡崎開市恩人宇津忠茂公 大久保彦左衛門忠教公 菩提寺」と刻まれている。「宇津」は大久保忠茂の旧姓だ。長い参道を歩くと樹林が広がり、本堂に至る。

大久保彦左衛門忠教

田園や丘陵、樹林の景観とも相まって、大変趣の深い寺院である。

大久保氏の先祖が帰依

長福寺は、天台宗・鳳来寺の末寺であったが、日蓮の弟子日印が文保2年（1318年）、京に上る途中、法華宗に改宗させた。本山は、越後三条の本成寺だ。

日道上人が長福寺中興の祖である。元は美濃国領主の土岐頼直（ときよりなお）という武将であった。田畑、堂などを寄進し、後に自らも沙弥日道と称して住職となり、長福寺の基礎を作った。日道上人の娘徳子は、三河上和田の領主、宇都宮泰藤に嫁いでいた。その縁で宇都宮泰藤も教化した。この泰藤が大久保家の先祖であった。宇都宮という姓はその後「宇津」と改められた。

大久保家累代の墓

大久保彦左衛門忠教墓
岡崎市指定史跡

大久保左衛門五朗忠茂墓
岡崎市指定史跡

大久保家累代の墓

大久保忠茂と忠俊

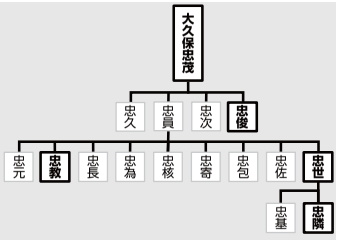
山中城攻略の功臣・忠茂の長男忠俊は、家康公の父・松平広忠に仕えていた。天文4年（1535年）、広忠より大窪姓を名乗るよう命じられる。松平家の家臣で武芸者だった大窪東五郎から、武勇の誉れ高い忠俊に大窪姓を継いでほしいとの末期の願いがあったとされる。

しかし、大窪姓に改姓してから忠俊は悪夢にうなされる様になり、長福寺の9代住職日朝上人によって大久保姓に改めたとされる。

天文16年（1547年）、忠茂が亡くなり、長福寺に葬られた。

大久保彦左衛門忠教の遺言

『三河物語』で有名な大久保彦左衛門忠教は、大久保忠員（ただかず）の8男。忠茂の孫にあたる。兄忠世らと共に家康公に仕え、数々の武功を挙げた。本家の大久保忠隣が失脚、改易となると、忠教も連座して改易された。しかし、家康公の直臣旗本として召し出され、三河国額田（愛知県幸田町坂崎）に千石を拝領し坂崎陣屋を構えた（その後さらに千石を加増）。



享年80歳と長命であった。生前、子の忠名に「長福寺は先祖の菩提寺である。死後は長福寺に葬るべし」と命じていた。

大久保家累代の墓と五百年の法要

長福寺の加藤徳昌（とくしょう）住職に墓所を案内していただいた。一番奥まった場所に、大久保忠茂の墓がある。前列に歴代の大久保家の墓が並ぶ。忠俊、忠員そして彦左衛門忠教の墓。忠教の墓前には、木が植えてある。忠教を尊敬していた吉田茂元首相から寄贈されたものだという。

「令和6年（2024年）は岡崎開市500年と、大久保家と長福寺にとって、大きな節目の年に当たり記念の法要を考えています」とのことであった。

本堂

参道

住職手作りの入口

石碑

2　現代に息づく岡崎の“市”―戦後の闇市から生まれた「二七市」の興隆

岡崎城公園から北東へ徒歩10分ほどの距離にある八幡通り（八幡町）で、毎月2と7の付く日に朝市「二七市（ふないち）」が開催されています。朝9時頃から、歩行者天国となる通りに数々の露店が立ち並びます。

～二七市の歴史～

第二次世界大戦の終戦後に八幡町で行われていた、闇市を母体とした「中央マーケット」をきっかけに誕生し、昭和30（1955）年12月12日に記念すべき第1回目の二七市が開催されました。昭和37（1962）年頃には、200軒を超える出店があり、にぎわいを見せていました。

時代の変遷を経てスーパーマーケットや大型モールなどが買い物の中心となった現在も、八幡町発展会が中心となり二七市の継続に努めています。

画像:往年の二七市の様子（撮影時期不詳）

画像：平成初期（1990 年代）頃の二七市の様子　　出所：どうする二七市ホームページ

3　現代に息づく岡崎の“市”―市民の記憶と商店街の風景

岡崎市の商業の歴史は、市民一人ひとりの記憶と深く結びついています。

昭和30年代（1950~60年頃）、康生地区や東岡崎駅周辺地区を中心とした商店街は、地元住民の生活の中心であり、買い物や交流の場として賑わっていました。当時の商店街には、衣料品店、食料品店、喫茶店など多種多様な店舗が軒を連ね、地域の人々の暮らしを支えていました。

これらの商店街は、単なる買い物の場にとどまらず、地域コミュニティの核としての役割も果たしていました。

各商店街の皆さまから寄せられた往年の写真からは、当時の商店街のにぎわいや人々の交流の様子が生き生きと伝わってきます。例えば、週末になると家族連れで商店街を訪れ、買い物を楽しんだり、知人と立ち話をしたりする光景が日常的に見られたといいます。また、商店主同士のつながりも強く、地域の祭りやイベントでは協力して準備や運営を行い、地域全体の結束を深めていました。

画像：岡崎銀座商店街

画像:東康生町通り商店街（昭和21（1946）年頃）

これらの当時の様子を伝える写真は、市民の記憶とともに、岡崎市の商業の歴史を後世に伝える貴重な資料です。また、現在のまちづくりや商業振興の取組においても、過去の姿を知ることで、地域の特性や魅力を再認識し、未来への展望を描く手がかりとなります。

第2章　岡崎開市500年を盛り上げる市の活動

岡崎市では、令和6（2024）年に迎えた「開市500年」の節目を機に、市民、事業者、行政が一体となって地域の魅力を再発見し、次世代へとつなぐ取組を展開しました。

1　記念ロゴマーク・のぼり旗の製作

(1)　記念ロゴマーク

「岡崎開市500年」のロゴマークを製作し、岡崎開市500年のPRを実施しました。

ロゴマークは、岡崎市観光協会が製作した、さくらピンバッジ「令和6年バージョン」のデザインをベースに制作されました。

さくらピンバッジ「令和6年バージョン」は、愛知産業大学造形学部スマートデザイン学科の柚木茜璃（ゆのき あかり）さんがデザインしました。

デザインには、岡崎の歴史や文化を象徴する要素が盛り込まれており、地域のアイデンティティを表現しています。

(2)　記念のぼり旗

記念ロゴマークを埋め込んだのぼり旗を製作しました。

市内の各団体の皆様にご協力いただき、市内各所に掲示していただきました。

2　記念ロゴマーク・のぼり旗の掲示・活用

記念ロゴマークとのぼり旗は、市の事業での使用や民間団体によって活用されました。

(1)　市の事業での活用

使用用途	担当課
ウスバキトンボ全国マーキング調査（チラシ）	環境政策課
家康公スイーツ×かき氷街道コラボスタンプラリー（チラシ・ポスター）	商工労政課
オカザキ夏のメシまつり2024	商工労政課
令和6年度家康行列	観光推進課
職員名刺	商工労政課
みんなでつくる おかざき生きもの図鑑（チラシ）	環境政策課
東部市民センター定期講座「山中城と岡崎開市500年」（チラシ）	生涯学習課
家康印歌舞伎スイーツ（チラシ）	商工労政課
岡崎開市500年2024岡崎城下家康公秋まつり（リーフレット）	商工労政課
岡崎開市500年チャレンジマルシェ（チラシ）	商工労政課
開市500年記念パネル展（ポスター）	商工労政課
岡崎フリモ12月号おかふる広告	商工労政課
「GOMANGOKU of Light 2024」プロジェクションマッピング作品	商工労政課
福祉フェアチラシ	介護保険課

(2)　民間団体での活用

記念ロゴマークの活用やのぼり旗の設置にご協力をいただいた民間団体の皆様をご紹介します。（五十音順、敬称略）

愛知県眼鏡小売商協同組合岡崎支部
癒しカフェバー　こもれび
有限会社大賀屋呉服店
岡崎資源回収共同組合
岡崎市青年経営者団体連絡協議会
岡崎商工会議所
岡崎市ぬかた商工会
一般社団法人　岡崎パブリックサービス
出会いの駅おかざき
三菱自動車工業株式会社
山中城址保存会

第3章　地域・団体の取組

画像：街路灯に設置された記念フラッグ

岡崎開市500年を契機に、市内の民間団体でも特色ある記念事業が実施されました。各団体の取組は、それぞれの地域性や特色を生かし、市民の暮らしに寄り添った身近な活動として展開されました。

1　連尺通発展会「記念手ぬぐい」制作

岡崎にはじめて楽市が開かれた場所とされている連尺通で活動する連尺通発展会では、開市500年を記念してオリジナルデザインの手ぬぐいを制作しました。

デザインには、町名を示す印字と、まちのシンボルである「ふくらすずめ」のモチーフが描かれ、地域への愛着や誇りを表現しています。

画像：記念手ぬぐいのデザイン

2　未来城下町連合「記念フラッグ」の展開

岡崎市の中心市街地に位置する12商店街の連合体である「未来城下町連合」では、年間5~6回、商店街の街路灯にフラッグを掲げて統一感あるまちの景観づくりに取り組んでいます。

岡崎開市500年を記念したフラッグは、愛知学泉大学美術部の学生がデザインを担当し、令和6（2024）年3月末から約1年間、篭田商店街、東康生町発展会、八千代通コミュニティー道路発展会、岡崎明大寺商店街振興組合など、市内12の商店街に掲示されました。

画像：まちを彩ったフラッグのデザイン

3　長福寺・宇津忠茂公岡崎開市五百年祭

画像：長福寺・宇津忠茂公岡崎開市五百年祭

令和6（2024）年11月3日（日）、岡崎開市500年の起源にゆかりの深い大久保（宇津）忠茂が葬られている長福寺（竜泉寺町）では、岡崎開市500年の節目に合わせ、記念祭を執り行いました。

記念祭では、地元の方々や財界関係者が集まり、本山より管長をお招きし特別法要などが行われました。

※長福寺：法華宗の寺院。山号は海雲山、院号は弘誓院。三河武士、大久保家初代の忠茂が葬られて以来、大久保家の菩提寺。

画像：長福寺本堂

画像：特別法要の様子

第4章　岡崎開市500年2024岡崎城下家康公秋まつり

1　開市500年の節目を祝う秋の一大イベント

令和6（2024）年11月2日（土）・3日（日）、乙川河川緑地を中心に「岡崎開市500年2024岡崎城下家康公秋まつり」が開催されました。

このイベントは、毎年秋に行われる、本市における3つの家康公まつり（桜まつり・夏まつり・秋まつり）の一つで、令和6年度は「岡崎開市500年」を記念した開催として、各所で多彩な催しが行われ、多くの来場者でにぎわいました。

秋まつり会場は、商業ゾーン、農林業ゾーン、企画体験ゾーン、工業・ものづくりゾーン、開市500年ゾーンの5つのエリアに分かれ、多種多様なイベントや物販、飲食、体験などの催しを提供し、2日間で約25,000人の来場がありました。

画像：広報紙「市政だより　2024 年 10 月1日号　特集記事」

① 商業ゾーン（商工フェア）｜乙川河川緑地・左岸

商工フェアでは、地元企業や団体による物販、飲食、体験ブース、キッチンカーなど多彩なブースが並びました。また、ステージイベントでは、地元中高生の演奏やダンス、伝統芸能などのパフォーマンスが繰り広げられました。

② 農林業ゾーン（農林業祭）｜乙川河川緑地・右岸

農林業祭では、地元産の農産物や加工品、木工製品などの展示・販売が行われ、新鮮な野菜や果物を求める人々が行列を作るほどの盛況ぶりでした。

③ 企画体験ゾーン｜乙川河川緑地・右岸

企画体験ゾーンでは、市役所各課や関係団体によるブースが設けられ、環境学習や公共交通利用の啓発など、学びと楽しさを兼ね備えた企画が提供されました。

④ 工業・ものづくりゾーン｜岡崎城公園内多目的広場

工業・ものづくりゾーンでは、岡崎のものづくり企業による製品展示や、伝統工芸のワークショップなどが実施され、来場者がものづくりの魅力を体感できる場となりました。

2　岡崎開市500年ゾーン

開市500年に関心を寄せ、新たな商業の担い手にふれることのできる「開市500年ゾーン」を図書館交流プラザりぶらに設け、各種企画を実施しました。

（1）　岡崎開市 500 年チャレンジマルシェ

「次の500年の岡崎の商業を盛り上げる、新たな商店主を支援する」をコンセプトに、若手起業家や店舗を持たない事業者を中心としたマルシェを開催しました。接客経験や陳列・PRの方法をトライする機会を創出することで、“未来の商業者のタマゴ”を支援しました。

（2） 岡崎開市 500 年記念パネル展

岡崎開市500年の所以や、昭和の映像資料、市内各地で活動する商店街の今・昔を比較するパネルを通して、来場者に市内商店街への関心を持ってもらえるような展示を行いました。

岩津商工発展会

語り継がれる伝統芸能

IWAZU

写真上：昭和30年頃の写真。11月の15か月間はまつりが開催され、賑わいを見せていました。

写真下：毎年開催している恒例の夏祭りの写真。（岩津市立郷土歴史交流センター）
「岩津雷神」などで知られる山祭りは歴史が長く、文化の伝承に取り組んでいます。

商店街名	岩津商工発展会
所在地	岩津町、東新前町、西新前町、真福寺町など
会員数	43名
主な活動	夏祭り、天神いちば、秋まつり、街路灯の維持・管理

岡崎銀座商店街振興組合

老舗と新店舗が共存する商店街

OKAZAKI-GINZA

写真：本町通1丁目付近。ビルやマンションが立ち並ぶようになったなかで、老舗の店は
現在も当時の様相を残しています。

商店街名	岡崎銀座商店街振興組合
所在地	康生通南1丁目、本町通1・2丁目
会員数	13名
主な活動	未来城下町連合及び（株）まちづくり岡崎の事業協力、 街路装飾（フラッグ装飾）の実施

グランロード商店街振興組合

灯りに照らされ光輝く商店街

GRAND-ROAD

写真上：平成12年8月4日に行われたグランロードサマースクエアの様子。
うちなのっぷ踊りやビンゴゲームなどが行われました。
写真下：グランロードという28本の街灯が光をともしています。
（稲熊町2丁目付近）

商店街名	グランロード商店街振興組合
所在地	稲熊町
会員数	33名
主な活動	街路灯の維持・管理

八幡町発展会

人情味あふれる歴史ある朝市

HACHIMAN

写真上：1555年から続く「二七市（ふないち）」です。2000年ごろには1000人を超える
出店があり、とても賑わいを見せていました。
写真下：現在もよりの行く日に開催しています。毎年でお年を迎えます。
新鮮な青果や手ごねの惣菜が販売されています。（八幡町3丁目交差点付近）

商店街名	八幡町発展会
所在地	八幡町1・2・3丁目
会員数	14名
主な活動	二七市の運営、街路灯の維持・管理

(3)　ガラスケース展示

「江戸時代から近代にかけての岡崎の商業」と題した展示を実施。所蔵資料等を用いて、往年の岡崎市の商業の興隆について紹介しました。開催期間：令和6（2024）年11月～12月

3　開市500年にちなんだスタンプラリー

「岡崎開市500年岡崎城下家康公秋まつり」では、来場者の各会場間の回遊を促進することを目的に、新たな企画として「デジタルスタンプラリー」が実施されました。

スタンプラリーは乙川河川敷左岸（商工フェア）、右岸（農林業祭・企画体験ゾーン）、岡崎公園多目的広場（工業・ものづくりゾーン）を基本チェックポイントとし、それに加えて他会場（りぶら、籠田公園など）への立ち寄り状況に応じて後述する「家康通宝（ゼニー）」と呼ばれる会場内通貨が進呈されました。

達成内容	特典
左岸・右岸・多目的広場の3か所	ゼニー1枚（500円分）
上記3か所 ＋ 他1か所	ゼニー2枚（1,000円分）
上記3か所 ＋ 他4か所（全会場制覇）	ゼニー4枚（2,000円分）

画像：スタンプラリー画面イメージ

画像：スタンプラリー拠点イメージ

参加者数は271名にのぼり、全会場をコンプリートした来場者も多数。スタンプラリーは商工フェア本部で景品と引き換えられ、イベント全体の回遊性と満足度向上に寄与しました。

4　ゼニーで楽しむ、岡崎開市500年の買い物体験

「家康通宝（ゼニー）」は、会場内や指定加盟店舗で使用できる会場内通貨として企画されました。ゼニーは500年前に流通していたとされる当時の通貨「永楽通宝」に着想を得たデザインで、1枚500円相当の会場内通貨として、ステージイベント参加者やスタンプラリー参加者等に進呈されました。

また、秋まつり当日だけでなく、イベント終了後も12月末まで市内加盟店での使用が可能となっており、地域消費を促す仕掛けとして好評を博しました。

- **配布方法**：スタンプラリー参加、ステージイベント参加賞など
- **使用可能場所**：商工フェア出展ブース、市内ゼニー加盟店舗
- **使用期限**：令和6（2024）年12月末まで（一部例外あり）

画像：家康通宝（ゼニー）のデザイン

また、新たな取り組みとして開催した「ジモトビールコーナー」では、4種類の地ビールを購入・スタンプを集めることでゼニーを獲得できる仕組みも導入され、飲食出店者との連携強化にも一役買いました。

第5章　次の500年に向けて

岡崎から、“これからの商い”をつくる

岡崎が「市（いち）」としての歩みを始めたのは大永4（1524）年と言われています。

それから500年。人々は市を立て、商いを営み、まちににぎわいを築いてきました。現代に生きる私たちは、そうした営みの延長線上に暮らしています。

しかし今、商業を取り巻く環境は大きな転換点を迎えています。インターネットによる購買行動の変化、個人経営の担い手不足、地域外資本との競合等、数々の課題を前に商店街や個店は新しい価値の再構築を迫られています。

岡崎市では、これまでの事業の中で、地域個店を起点とした活性化の可能性を見いだしてきました。たとえば「岡崎市地域店舗ファンづくり推進事業」では、800を超える事業者が自発的に参加し、自店の魅力発信やファン獲得に取り組んでいます。創業支援（岡崎ビジネスサポートセンター、創業塾など）も年々活況を呈し、新たな商業の担い手が育ち始めています。

今後はこうした動きをさらに広げ、次の500年を見据えた「新しい商いのかたち」を市全体で模索していくことが求められます。たとえば、

・公共空間や商業空間の再定義（空き店舗・路上・公園の活用）
・商業×福祉・教育など、他分野連携型の店舗経営
・地元産業×デジタル技術による販路・魅力の拡張
・世代や国籍を超えた「商いの担い手」育成の場づくり

といった取組が、まちの新たな未来像を形づくる鍵になるでしょう。

商いとは、物を売ることにとどまりません。人と人が出会い、語らい、関係を結ぶ営みそのものです。

この500年の節目を、新しい500年の「はじまり」とするために。

私たちは、商いの過去に学び、未来に挑む覚悟を新たにしています。

あとがき

本冊子『岡崎開市500年 記念冊子』を、ここまでお読みいただきありがとうございました。

岡崎の「開市」から数えて500年という節目の年にあたり、私たちは「市（いち）」という場がまちに果たしてきた役割を、改めて見つめ直したいと考えました。日常生活の中で、商業にふれること、買い物をするということは必要不可欠ですし、楽しい体験でもあると思います。岡崎という地で、今まで500年の商業を育ててきた人たちを、もっと知っていただきたい、もっとその人のところで買い物をしていただきたいと考え、取組を進めてまいりました。

歴史資料を紐解き、現在のまちのにぎわいを記録し、未来の商いに想いを馳せるその作業は、単なる記念にとどまらず、岡崎というまちの芯をたどる時間でもありました。

かつての岡崎には、まちの至る所に「市」がありました。人と人とが交わるその場所は、単に物を売買する空間ではなく、文化が生まれ、暮らしが息づく営みの舞台でもありました。

いま、そうした場の価値が、もう一度見直されようとしています。

この冊子が、市民の皆さまや関係するすべての方にとって、岡崎の商業の歩みとその未来を考えるきっかけとなれば幸いです。そして、次の500年へ。このまちが、引き続き人とまちをつなぐ「市」としてあり続けること、そうした「市」のファンであふれる岡崎市となることを願ってやみません。

最後に、本冊子の制作にあたりご協力いただいた関係者の皆さま、市内商業者の皆さま、そして読者の皆さまに心より御礼申し上げます。

令和8（2026）年４月

岡崎開市500年記念冊子 編集部

岡崎市経済振興部商工労政課

岡崎開市
500年
記念冊子